女子バレー部

丸山監督の思いつなぐ

初の関東大学リーグ1部昇格を狙う女子バレーボール部は、前監督のレガシーを胸に新たな道を切り開く。

昨年、早大戦で勝利を喜ぶ丸山監督（上）。23年から江戸川大学の指揮官として学生の育成に力を注いできた

憧れの「あの人」を目指して——

バレーボール部員は、各地の強豪高校から集まり、さらに高いレベルを目指して日々プレーを磨く。そのモチベーションとなっているのは、憧れの存在だ。

こどもコミュニケーション学科3年 埼玉・細田学園高

牧野葵↓高校の2学年上の先輩（某大学）

有名選手ではないが、現在ライバル校は大学進学を機にミドルブロッカーを務める。真っ先に頭に浮かんだ「練習方法やプレーを高校時代の記憶や現在の姿から学んでいる」という牧野

こどもコミュニケーション学科3年 千葉・植草学園大学附属高

沼倉美桜↓岩澤実育（埼玉上尾メディックス）

同じリベロの日本代表。「リベロは試合で目立つことが少ないけど、岩澤選手は試合中にコートの中で存在感があり、そばにいると力づけられる。プレーはもちろん盛り上げる面も尊敬している」と話す。

経営社会3年 大分・東九州龍谷高

飯尾風香↓室岡莉乃（元日立リヴァーレ）

「169㌢と小柄にもかかわらず、最高到達点が3㍍超え。オールラウンダーとして活躍している」ところに憧れる。練習の際に、チームメイトから嫌われる覚悟で厳しく声掛けをしている姿にも影響を受けたという。プレーだけでなく、人として尊敬される大切さを教えてくれた存在だ。

マスコミ4年 福井工大福井高

牧田奈々↓山下晴奈（デンソーエアリービーズ）

高校の先輩であり「スパイクが強いのにレシーブもリベロ並みにうまくてオールラウンダーとして活躍している」ところに憧れる。練習の際に、チームメイトから嫌われる覚悟で厳しく声掛けをしている姿にも影響を受けたという。プレーだけでなく、人として尊敬される大切さを教えてくれた存在だ。

"レシーブ上げつないで粘り強いチームに"

坪井 添野

昨年9月リーグ戦中、闘病していた丸山貴也監督の死去がチームに伝えられた。63歳だった。

丸山監督は長野県で生まれ、筑波大でプレーし、女子日本リーグの強豪だった日立のコーチに就任した。1984年のロサンゼルス五輪では、女子日本代表のアシスタントコーチを務め、銅メダル獲得に貢献。その後は小田急ソノーやKUROBEアクアフェアリーズで監督を歴任し、2023年から江戸川大学の監督として学生の育成に力を注いできた。

代行監督として昨秋に指揮を執った山越奈央コーチは、丸山監督が江戸川大学にもたらしたことを「できた当たり前」のプレーの質を上げることだったと説明する。それがチームを支える守備力の強化につながっている。

身長170㌢超え2人でも

副主将の坂上（経営社会4年、千葉・流山おおたかの森高）は「丸山貴也監督にはレシーブを上げてつないで粘り強いチームになることが大事だと教わった」と語る。江戸川大学は関東2部リーグ所属のチームとしては小型で、身長170㌢以上は2人しかいない。

当然ブロックや高い打点の攻撃では上位校に劣ることになる。だからこそ、どんなボールも落とさず上げ、全員でボールを攻撃へつなぐレシーブが大切だ。息の合ったコンビ攻撃で相手のブロックを外すには、特に正確なトスが必要で、正確なトスを生み出すのが精度の高いレシーブなのだ。

目標あえて手前に設定

その強化の成果が出たのが、春の4勝7敗から大きく成績を伸ばし、8勝3敗で終えた昨秋のリーグ戦だった。特に早稲田大と戦った最終戦は、今季につながるチームの戦いを象徴していた。2セットを先取されたが、フルセットまで持ち込み、デュースとなった第5セットを17―15で制して3―2で勝ち切った。江戸川大らしい粘りを見せた試合だった。

今年は主将の小野紬（こどもコミュニケーション4年、埼玉・細田学園高）の下「入れ替え戦出場」を目標とする。これまで掲げてきた「一部昇格」という目標をあえてその一つ手前の一戦に持ってきた。それは自分たちが戦う2部での前の試合を勝ち切るという強い意思表示なのだ。目標に向かって突き進む選手一人一人の胸には、もちろん丸山監督の教えがあり、それは江戸川大のレガシーとして次世代へと受け継がれるだろう。

坂上 中村

亡き恩師の教え胸に「入れ替え戦出場」狙う

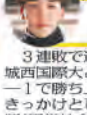
各部の2025ベストゲーム

各強化部には、それぞれ今季につながる昨季の好ゲームがあった。2025のベストゲームは——。

女子バレーボール部

①9月21日＝関東大学2部L都留文科大戦
②10月19日＝関東大学2部L早稲田大戦

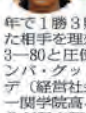
①第1セットを取られたが、そこから全てデュースで3セット連取。第4セットは30―28だった。山越奈奈コーチは「一度も勝ったことなかった相手。格上にはあっさり負けることが多かったチームの精神力が強くなったように見えた」と話す。試合後に丸山貴也監督の訃報が伝えられ、忘れられない試合となった。②2セットを失ってからの逆転勝利。第5セットはデュースで制した。主将の小野寺紬（こどもコミュニケーション4年、埼玉・細田学園高、写真）は「最終戦で負けられないのに1、2セットを取られてしまった。不利な状況から全員の力で勝てたので印象的」と振り返る。



フットボールクラブ

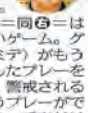
10月5日＝千葉県大学1部上位L城西国際大戦

3連敗で迎えた首位の城西国際大との試合に2―1で勝ち上位に留まるきっかけとした。水口由翔（経営社会4年、札幌西陵高／北海道コンサドーレ札幌U―18、写真）は「なかなか勝てないシーズンの中で首位相手に先制点を取り、順調に試合運びができた。勝ち切れたところが印象に残っている」と語った。綿山一喜マネジメントスタッフ兼コーチは「押し込まれる時間帯もあったが踏ん張って必ず勝つという気持ちが表れていた」と語る。



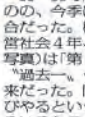
女子バスケットボール部

9月27日＝関東大学2部L松蔭大戦



そこまでの2年で1勝3敗と分の悪かった相手を理想的な試合で103―80と圧倒した。オズルンバ・グッドネス・アヨミデ（経営社会4年、岩手・一関学院高、写真㊧）は「自分が得点源であることは相手にバレている。松蔭大戦では周りが点を取ってくれた」と振り返る。

石川優希監督＝同㊧＝は「完成度の高いゲーム。グッディ（アヨミデ）がもう一段階、進化したプレーを見せてくれた。警戒される中で周りを使うプレーができるようになり、手を付けられない状態だった」とエースを絶賛した。



男子バスケットボール部

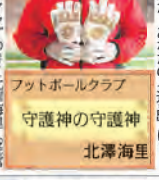
11月5日＝関東大学L1部入れ替え戦 神奈川大第2戦

55―58で敗れはしたものの、今季につながる試合だった。梶谷崇太（経営社会4年、広島皆実高、写真）は「第1戦は自分が"過去一"ぐらい悪い出来だった。同じ相手と再びやるということで、いろいろなことを変えて入った。4年生との最後の試合で、勝たせてあげられなかった。ただ、ビビらずに挑戦することはできたと思う」と振り返る。

粂川浩勤監督は「入れ替え戦ならではの独特な雰囲気を味わった。あと一歩を努力すれば届かない目標ではないと感じた」と戦いぶりを評価した。

俺の!!私の!!おすすめアクセサリー

アクセサリーだったり用具だったり、アスリートはこだわりが強い。各クラブのこだわり派に聞いてみた。あなたの「逸品」は？



フットボールクラブ

守護神の守護神

北澤海里

フットボールクラブのGK北澤海里（経営社会3年、千葉・敬愛学園高）が「毎日持ち歩いている」と言うのは「N」のキーパーグローブだ。相手が体重を乗せて殴り込んでくるボールを弾き返すGKの手を守る。「自分は手があんまり強くないのだけど、このグローブはすごくフィットしている」と守護神がの頼りにする守護神なのだ。

女子バレーボール部

カバンが重い？

横関華南

アクセサリー好きが多いバレーボール部の中でもバックパックにぶら下がる数で目を引くのが横関華南（こどもコミュニケーション2年、千葉・市立柏高）だ。最初に手に入れたのはミッキーのカチューシャだった。「1年の夏ごろから」一気に増えて今ではカバンの両側にスラリ。一番のお気に入りは…と考え込んだ末に選んだのは、ズートピアイスキャンディーチャーム。確かにかわいい。

女子バスケットボール部

おそろいの「サプリナ」

大山留愛、高橋怜以片岡姫菜、渡辺優亜

コートで動き回る女子バスケットボール部3年生の足元がカラフルだ。史上最高の3Pシューターと言われるサプリナ・イオネスクのモデル、ナイキの「サプリナ」の色違いがずらっとそろう。大山留愛（経営社会3年、山形中央高）と高橋怜以（経営社会3年、埼玉・松栄学園高）が2年春に履き始めたことをきっかけに「履きやすい」と同学年に広まった。機能はもちろん、明るい色合いのデザインも「かわいい」と評判だ。片岡姫菜（こどもコミュニケーション3年、千葉・東金高）や渡辺優亜（こどもコミュニケーション3年、東京・文化学園大杉並高）も加わり、一大勢力だ。

男子バスケットボール部

思い出のハンギョドン

岡山成龍

男子バスケットボール部の岡山成龍（現代社会3年、千葉・市立柏高）のカバンには、ひときわ目を引くハンギョドンのマスコットが…。「旧が良かった」という高校生の大切な思い出がつまったものだ。先輩からもらったものだ。先輩の思い出がつまったハンギョドンを「かわいいの」、カバンに飾りがあったら目立つ」と大事につけて今日も練習へ向かう。